近世学問都市京都の総合研究プロジェクト

近世京都の学問と東アジア

桂島宣弘（文学研究科）石黒衛（COE推進機構）

概要　近世都市京都は、三都の一つとして著名であるが、従来は専ら伝統産業の側面や朝廷・寺社の存在地としてのみ注目されてきた。一方、京都を中心とした学者については、藤原惺窩や山崎闇斎学派、伊藤仁斎、さらに石田梅岩などについて数多くの研究が存在するものの、こうした学者を輩出した学問都市京都に関する総合的考察は皆無に等しい状況にある。本プロジェクトは、アジアの中の京都の学問的な地位に注目しながら、学塾の分布、ネットワーク、門人の移動と交流、江戸・大坂はもとより清国・朝鮮王朝との比較などを行い、京都教学の学問的特質を明らかにしていく。

Comprehensive research on early modern Kyoto as an academic city Project

Study of early modern Kyoto and East Asia

Nobuhiro katsurajima(Graduate School of Letters)Mamoru Ishiguro(Centre for Promotion of the COE)

Abstract: Kyoto, an early modern city is well-known as one of the three old capitals in Japan. Kyoto has attracted people because of its traditional industry, and the fact that there used to be the Imperia l Court and temples and shrines.There exist a lot of studies on the scholars from Kyoto, such as Fuji wara Seika, Yamazaki Ansai disciples, Itou Jinsai, and Ishida Baigan. However, there has been no com prehensive and unified research on Kyoto itself as an academic city.
This project is intended to give integrated consideration on Kyoto as an academic city and the educati on and academism from the following ways: (1)clarifying the distribution of Scholastic groups and the n etwork among them, (2)describing the transference and interaction of the disciples, (3)comparing Kyoto with Edo, Osaka, China, and Korea.

はじめに

近世京都は、「学問都市」として多くの学者を輩出してきたが、この京都を中心とした学者についての従来の研究は、藤原惺窩や林羅山を中心とした所謂京学派、山崎闇斎並びに崎門派、あるいは伊藤仁斎、石田梅岩等、個別の学者の思想分析に終始しがちであり、こうした学者を輩出した学問都市京都に関する総合的考察は皆無に等しい状況にある。またその思想史的叙述は極めて一国史的視点でなされているのが現状である。

「近世学問都市京都プロジェクト」は、こうした個別の学問・学者に拘泥されず、学問都市京都についての総合的な考察を目指すものであり、特に、東アジアの中の京都という視点から、京都教学の学問的特質を明らかにしていくものである。

本プロジェクトでは、上記の目的を達成するために、昨年度の研究を継承し、日本・中国・韓国の研究者を中心とした学術研究ネットワークを構築し、学問都市京都研究の拠点形成を図ること、また近世学問都市京都における知的分布を明らかにするための近世京都に関わる学者・文人等のデータを収集分析すること、特に本年度は『平安人物志』を中心に作業を進めてきた。

本年度の研究概要については以下のとおりである。

1、研究会・シンポジウムの開催

本プロジェクトでは、近世学問都市京都研究

に関わる研究者との交流を深め、研究拠点の構築を目指すための学術研究会・シンポジウムを開催した。

第一回研究会では、石黒衛（COE特別研究員）により「石門心学研究の現状と課題」と題する報告がなされた。本報告では、『季刊　日本思想史　特集石門心学』（ぺりかん社、2004年）を素材として、近世京都の学術を考察する上で重要な意味を持つ石門心学研究の現状と課題が論じられた。また当日は執筆者の高野秀晴氏（日本学術振興会特別研究員）を交えての有意義な議論がなされた。

第二回研究会では、棚橋弘巳氏（立命館大学大学院研修生）により「ベトナムの伝統と近代ーファン・ボイ・チャウを手がかりにして」の報告がなされた。本研究会は、日本・中国・韓国を中心とした学術の広がりを主たる考察の対象としてきたが、棚橋報告によるベトナム儒学についての議論は、所謂儒教文化圏・漢字文化圏であるベトナムの視点の重要性を再認識させられるものとなった。

2004秋季国際学術研究会では、「近世京都の学問と東アジア」のテーマ設定のもと、基調講演として、高橋文博氏（岡山大学文学部教授）、個別報告として、龔穎氏（中国社会科学院哲学研究所助教授）、成海俊氏（韓国東明情報大学校助教授）、コメンテーターとして、宇野田尚哉氏（神戸大学助教授）を招聘し、桂島宣弘（立命館大学教授）による司会のもと、学術交流が図られた。

報告者と論題は以下のとおりである。

・高橋文博氏（岡山大学文学部教授）
「近世学問都市京都」
・龔穎氏（中国社会科学院哲学研究所助教授）
「中国と日本における『学蔀通弁』の伝播と思想史的意義」
・成海俊氏（韓国東明情報大学校助教授）
「林羅山の朱子学の発展と朝鮮の書物」
・石黒衛（COE特別研究員）
「近世儒学と中国・朝鮮」

基調講演では、これまで京都の関わりでは論じられることの無かった、中江藤樹と会津藤樹学派について論じられた。両者の思想的特質を近世京都に位置づけることで、これまであまり省みられることのなかった会津藤樹学と京都の関係が明らかにされ、近世京都が如何に学問都市として機能していたのかという指摘がなされた。

龔穎報告では、日本思想史研究において、特に近世前期における異学批判の書として藤原惺窩や林羅山に見いだされ、注目されてきた陳健『学蔀通弁』について、中国における研究状況や書誌学的分析による諸本の異同、日本・中国・韓国における伝播の問題とその特質が明らかにされた。

成海俊報告は、早くから東アジアに流布していた『明心宝鑑』をめぐって、韓国・中国・日本における問題を比較考察しながら、壬辰倭乱による書物の流入が日本儒学にもたらした影響の大きさと、東アジアにおける善書の広がりとその特質を論じたものであり、善書研究の将来的発展の可能性を予想させる報告であった。

また、宇野田氏からは上述の報告に対して、テーマ設定の問題点を踏まえながら、東アジアの学術を議論する際には狭い意味での朱子学だけでなく、より広く東アジアの知的状況を分析する必要のあること、また京都を問題にする際には周辺の大坂や在村の知識人の状況も合わせて考察すべきとの問題提起がなされ、議論がなされた。

なお、本シンポジウムの成果は『2004年秋季国際学術研究会　近世京都の学問と東アジア』として刊行された。

以上の研究会・シンポジウムでは、様々な研究分野から多くの研究者の参加を得ることができ、学術交流を深めることができた。また、研究者間のネットワークも広がりを見せてきている。今後もこうした研究会・シンポジウムを継続し、近世学問都市京都の特質を解明する研究拠点としての充実をはかっていきたい。

2、近世京都の学問と東アジア

2－1、はじめに

近世学問都市京都の特質を解明するために

は、近世の知識人たちの学んだ儒学について明らかにしておく必要がある。彼らの学んだ儒学とは、宋明儒学、特に中国宋代に成立する朱子学である。理気二元論に基づき、宇宙論から道徳論までをも包括する哲学体系である朱子学は、中国・韓国・日本をふくむ前近代の東アジアの文化圏において、普遍的な思想として展開されてきた。

それ故日本における朱子学の問題を考える上では、単に近世日本の列島上に展開された思想史的問題として考察するだけではなく、明清儒学や朝鮮性理学との関連でなされる必要がある。

「近世儒学の祖」と称される藤原惺窩における仏教から儒学への転向には、朝鮮朱子学者の姜沆との出会いがあった。姜沆は朝鮮性理学の大儒・李退渓に連なる学者である。つまり京都から始まる日本の朱子学は、そもそもの始まりにおいて宋明儒学や朝鮮朱子学が存在していたのである。

では、その思想的特質はどのようなものであろうか。近世前期は、壬辰倭乱による大量の朱子学関係書物と印刷器具、大量の銅活字がもたらされ、京都を中心とした出版文化の成立した時代であった。その出版文化の成立のなかで、朱子学関係の基本図書の出版を担っていたのが藤原惺窩の門人たち、所謂京学派の儒者たちであった。

2－2、『性理字義』と日本儒学

では、彼らの知的営みとはどのようなものであったのであろうか。朱子学の基本的解説書である『性理字義』を取りあげて述べてみたい。

『性理字義』は、朱子の門人陳北渓の手になるもので、初学者のために、「命」「性」等の性理学の基本概念の意味を解説したテキストである。

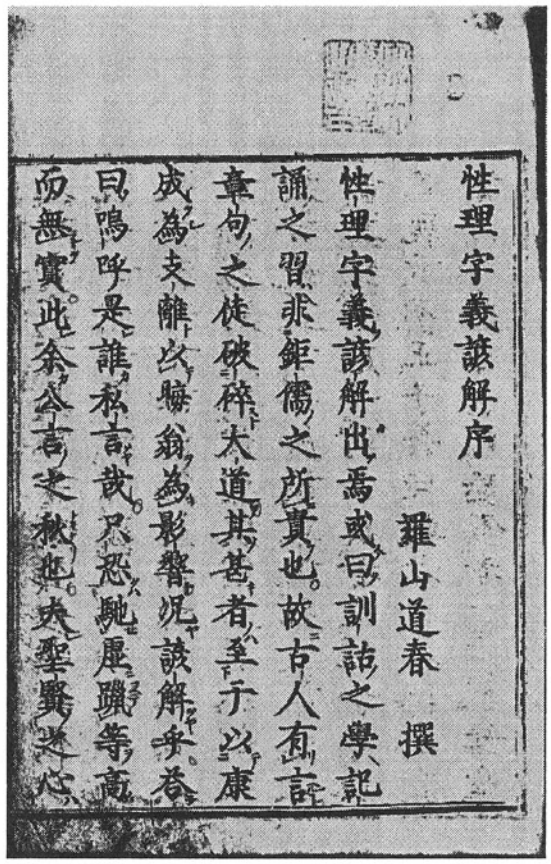
この書は近世日本において早い時期から流布しており、朝鮮本・漳州本の二系統を底本とした以下の五種が確認されいる。

(1) 元和活字印『北渓先生性理字義』、元和四年(1618)以前に出版。
(2) 寛永刊『北渓先生性理字義』、寛永五年(1628)、寛永九年(1632)。
(3) 寛文刊『重刊北渓先生字義詳解』、寛文八年(1668)。
(4) 寛文刊『北渓先生性理字義』、寛文十年(1670)。
(5) 刊年不明『北渓先生字義詳解』。

京学派の熊谷了庵は、『性理字義』に一二点・レ点・ヲコト点・送り仮名を振り、詳細な頭注を付して、寛文十年(1670)に刊行した(図1)。また林羅山は、元和七年(1621)には朝鮮本『性理字義』を手写し、万治二年(1659)に『性理字義諺解』(羅山没後に刊行)を著している(図2、図3)。諺解とは仮名書きの解説書のことであり、京学派の知的営みの特質は、出版を通じた朱子学的知識の啓蒙にあったといえよう。

北渓先生性理字義序
道德性命之緼陰陽鬼神之秘固非初學所當驟窺苟不先析其名義發其肯綮使之有所鄉望則有終日汨沒於文字自首不知

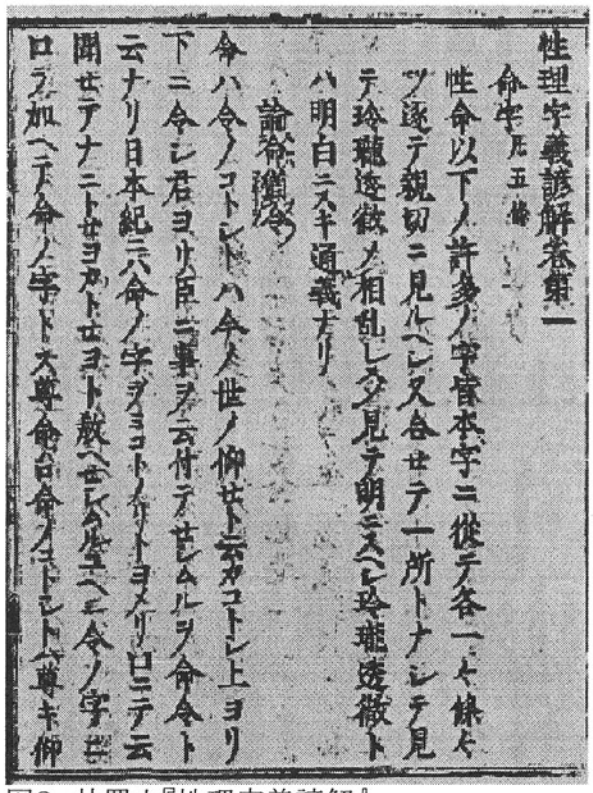
図1、熊谷了庵『北渓先生性理字義』


性理字義諺解序

羅山道春　撰

性理字義諺解出焉或曰訓詁之學記誦之習非鉅儒之所貫也故古人有詩章句之徒破碎大道其甚者至于以康成為支離以騁翁為影響況諺解乎若曰嗚呼是誰敢言哉只恐馳騁躐等高而無實此余今言之秋也夫聖異道心

図2、林羅山『性理字義諺解』


性理字義諺解卷第一

命字凡五條

性命以下ノ許多ノ字皆本字ニ從テ各一々條々ヲ逐テ親切ニ見ルヘシ又合セテ一所トナシテ見テ玲瓏透徹ノ相乱シタル見テ明ニスヘシ玲瓏透徹トハ明白ニスキ通義ナリ

論語獺祭

命ハ令ノコトシトハ今人世ノ仰セトヽカコトシ上ヨリ下ニ令シ君ヨリ臣ニ事ヲ云付テ世シムルヲ命令ト云ナリ日本紀ニハ命ノ字ヲミコトノリトヨメリ曰ニテ云聞セテナニトセヨカトセヨト教ヘセシムル生ヘシ令ノ字ニ口ヲ加ヘテ命ノ字ト大尊命ト命ノミコトシトヘ尊キ仰

図3、林羅山『性理字義諺解』

こうした京学派による啓蒙的朱子学のあり方への批判として登場するのが、山崎闇斎と崎門派であり、闇斎はしばしば『性理字義』を空理に流れる議論として批判し、闇斎の弟子である浅見絅斎は、宝永三年（1706）から『性理字義』を批判的に扱った講義を行っており、その講義録が現在『性理字義講義』として写本で伝わっている（図4、図5）。

崎門派による知的営みとは、朱子後継による解説的・啓蒙的朱子学に解体的に関わることによって、自らを朱子の正統に位置づけるものであり、日本における道学の成立として理解することができる。また書物に関していえば、講義録をあえて内部に秘することによって、その正統性を主張したといえる。

『性理字義』は、近世を通じてその他多くの学者によって言及されるテキストであり、また明清儒学・朝鮮朱子学においても重要な位置を占めている。今後はそれらのテキストを読解・分析することを通じて、東アジアにおける近世学問都市京都の特質を明らかにしていきたい。

図4、浅見絅斎『性理字義講義』

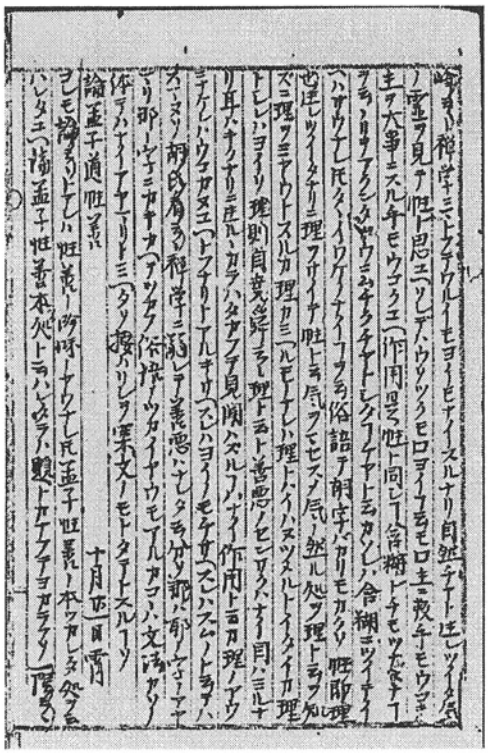


図5、同上部分

3、近世京都知識人名鑑

本プロジェクトでは、近世学問都市京都における知的分布を明らかにするための近世京都に関わる学者・文人等のデータを収集分析中であり、本年度は特に、『平安人物志』文化十年版を中心に作業を行った(図6)。

『平安人物志』は、江戸時代において京都に遊学する者たちのための案内書であり、近世京都の知識人の分布を知るには、格好の史料である。この書は明和五年(1768)、安永四年(1775)、天明二年(1782)、文化十年(1813)、文政五年(1822)、文政二十三年(1840)、天保九年(1838)、嘉永五年(1852)、慶応三年(1867)の九版にわたる改訂出版がなされており、内容としては、京都に在住する学者・文人等を「儒家」「和学」「医家」等の部門に分類し、その姓名・字・号・通称・住所が記載されている。(文化十年版では21部門、のべ412名)。

この『平安人物志』文化十年版を元に、収録されている人物のデータの正誤を確認し、さらにその生没年、出身地、系図、門人関係、墓所等の項目に従ってデータのカード化を進行中である。

この『平安人物志』については、従来医学史、美術史等の個別の研究分野で取り上げられることはあったものの、この書を総合的に取り上げた研究は皆無に等しい。つまり『平安人物志』による分類に従って、それぞれの研究分野に応じて言及するにとどまっている。本プロジェクトの作業を通じて、『平安人物志』を成り立たしている知とは何であったのか、そのことを明らかにしていきたい。またこの作業を通じて、近世学問都市京都の総合的な研究が進展することとなろう。

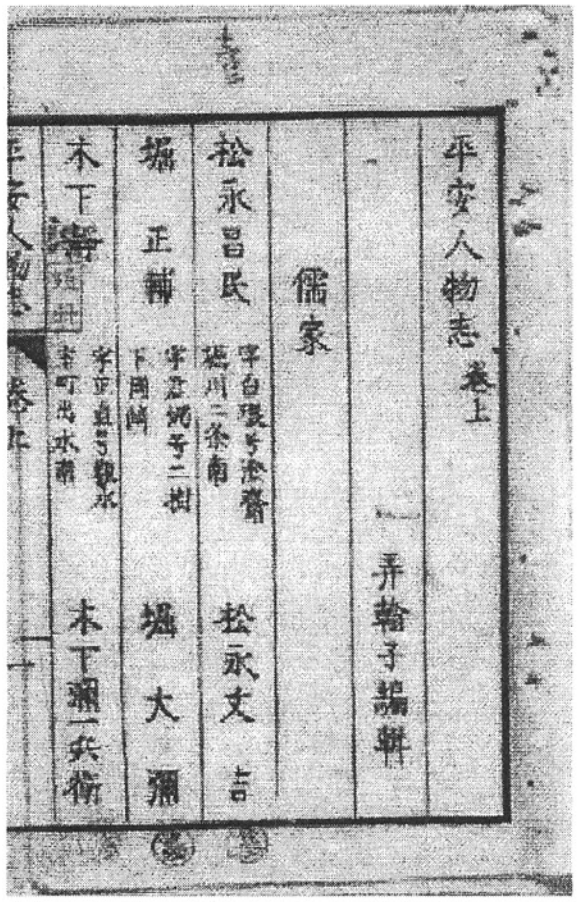


図6、『平安人物志』文化十年版